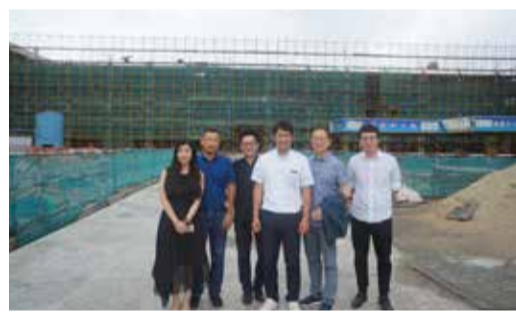




マルヤガーデンズの屋上庭園ソラニワ



中国の現場



から作品をもっと送って来て！」その後スカイプで面接。インターンでもバイトでも丁寧な対応でいいから入れてくれと懇願した。結果は「君に決めたよ。なにより、そのしつこさがいいね」。オーストラリアでは文化、仕事英語など、不慣れなことばかり。一方デザインの世界で試されるのは、日本文化をバックグラウンドにした独自の表現。自分が何を表現したいのかが問われた。最初にデザインしたのはオーストラリア国立美術館のランドスケープ(広場)。世界的に有名な環境アーティストコロポ、緑の風景をパノラマで見せるベンチをデザインした。アートをより自然に感じられる空間が、生活の質をより豊かにする。保さんが日本に帰ってきて初めて設計したのはマルヤガーデンズの屋上庭園ソラニワ。以後、東京中目黒の山手通

りの植栽設計や、八王子市の歩行者優先道路の景観デザインなど活動の幅が広がる。環境改善のため開発した「フラクタルひよけ」が国外でも使われるようになって、世界を飛び回る機会も増えたという。ランドスケープのやりがいを見出すと、「それは空間として残ること。植物は成長しますから、建築と違い価値が上がっていくところも面白い。一年目に植えた草花が、百年生きることもあります。中学生の時に父親がランドスケープ発祥の地ニューヨークやサンフランシスコ、グランドキャニオンに連れていってくれた。漠然と都市と自然の溶け合いが気がきれいなと思った。今思えばそれがきっかけかも。いまいと振り返る保さん。いま彼の感性と溶け合った風景がひとつまたひとつと広がっていく。



Profile

Kiyohito Tamotsu

1981年生まれ 鹿児島市出身。
西薬原小、西薬原中、松陽高校、工学院大学卒業。コペンハーゲン大学、スウェーデン農業科学大学、Madison English as second language schoolなどへの留学や池坊お茶の水文化学院などの専門学校にも通う。オーストラリアのMcgregor coxall, Taylor Brammer landscape architectsに入社し、2009年より現在、株式会社ロスキー東京事務所に勤務。



羽田空港第二ターミナルに設置された「フラクタルひよけ」

アートをより自然に感じられる空間が生活の質をより豊かにする。

リアルしごととレポート

中高生と働く大人の対話型イベント「リアルしごとと」。2017年夏、鹿児島玉龍高校・錦江湾高校の2校で開催されました。車座での対話セッションではたくさんの質問が飛び出しました。

みんなはどんなことが知りたい？

- Q 薬剤師にはどんな人が向いている？ (錦江湾高校)
A 人が好きな人。そしてコツコツと何かが出来る人が向いていると思います。
薬剤師 亀之園 学
- Q 勉強しておいた方がいい科目は？ (玉龍高校)
A この科目をやればいいというのではなく、自分の好きな科目をとことん追求すればいい！
研究開発職 杉原一成
- Q やる気が出ない時はどうしている？ (錦江湾高校)
A ①思い切って気分転換。
②目標を設定すること。具体的にすることが見えてきます。
プロスポーツ選手 寺田 匡史
- Q 文章力は必要ですか？ (玉龍高校)
A 文章が書けるよりも、人と話をするのが好きか、人の話が聞けるのかの方が必要かも。
新聞記者 清水 優紀
- Q 今、高校生の時点でやっておいた方がいいことは？ (錦江湾高校)
A 何だろうと思うこと。そして相手の視点で見ることを知ることが大事です。
救急看護認定看護師 橋口 恒夫



Shigotobito File No.111
 ランドスケープ
 アーキテクト
 Kiyohito Tamotsu
 保 清 人

「君の考えていることは今は海外でしかできないな」と教授に言われて北欧への留学を決意しました。

お気に入りの場所はありますか。学校の屋上が好きという人もいれば、近所の公園、街中のカフェ、飛行機が飛び立つ空港のデッキという人もいるかもしれない。今回出会った人物は建築だけではなく、アートだけでもない、それらと自然を融和させ、街の中に居心地のよい風景をつくりだすランドスケープアーキテクト 保清人さんだ。



ランドスケープとはいったい何？
 ランドスケープを辞書で調べると「風景、景観」とある。ウィキペディアで調べると「ある土地における、資源、環境、歴史などの要素が構築する政治的、経済的、社会的シンボルや空間。または、そのシンボルや空間が作る都市そのもの」とある。ピンとこないまま保さんに尋ねてみると、「ランドスケープは特にみどりや水、人と人と自然をつなぐ仕事です。最近ではグリーンインフラとも呼ばれています。人間になくてはならない衣食住ですが、都市化が進む今では、緑もなくてはならないものになっています。なるほど、コンクリートとアスファルトだけでは満たされないものが中にはある。建築のような箱の中はすべて豊かで住み良い暮らしにならない。ただ、街中を歩くこと

かりますが、私達が見ている景色の七割は道路や歩道。建物は三割程度。私がランドスケープを始めるきっかけとなったのはまちの風景を占める道路や歩道をデザインしたかったからです」
 陸上部と科学クラブ
 中学生の頃は、体が一人一倍大きくてスポーツも人並み以上。高校も体育推薦で入り陸上部で部活漬けの毎日だった。「ずっと体育の先生になりたかったんです。怪我をしてから良い記録がでずに別の道を探していたのが高校3年のときでした。勉強も楽しくなりました。理系の大学に挑戦することに。しかし、文系にいた保さんには数学、物理の授業が足りなかった。部活終わりに先生を捕まえて夜中までずっと教えてもらっていました。そんな先生の一人が科学クラブに入らないかと誘ってくれて、興味本意で地震の研究をしていたら、工学院大学が募集していた科学論文賞をとってしまいました。賞をとると、面接のみの推薦で、工学院に入る事ができました。なんの因果か、父も工学院を出たことを知って、行ってみようとなったんです。建築学科を専攻し、地震の研究でもしようかなど思っていました」

興味湧くと、あくまで行動



中国のプロジェクト

大学に入って設計やデザインの仕事が楽しく、建築の奥深さを知った保さん。特に魅了されたのは人間の所作と運動した極小の建築である茶室と茶庭との幸せな関係。そしてガウディの建築と公園だった。ランドスケープという分野が取り扱う建築と屋外空間の一体的なデザインに大変興味を湧かせていました。教授から「君の考えていることは今は海外でしかできないな」と言われて北欧の農業大学の留学を決意しました。工学院に在学中は茶道、華道、香道、装道の専門学校にも通っていました。その行動力はどこから湧いてくるのだろうか。さらにアメリカウィスコンシンにも語学留学。そこでは英語で建築論文を書く機会にも恵まれ、3ヶ月の間ヨーロッパ、一部アフリカを旅することもできた。外国では日本の建築や日本文化を聞かれることがありますが、お茶や華道などをやっていたおかげでコミュニケーションはスムーズでした。大学を卒業し、

保さんは北欧の大学院でランドスケープを学ぶことになった。そこは学費も無料な修士プログラムで世界各地から選ばれた人たちが集まっていた。冒頭で教授が言ったのは「あなたたちはプロフェッショナルだから、プロとして世界に貢献してください」だった。

百年先のまちを創造しながら
 北欧の大学院時代、保さんは80件もの会社にアプライした。「アフリカをのぞくすべての大陸で就職先を探しました。苦戦しているなかで、思いもよらない国オーストラリアからメールが来たんです。おもしろそうだ

